蘇生（重陽）短歌集

平成十二年より平成十四年まで

桃李歌壇　和歌連作の部屋の投稿歌より

爽涼の崎へだつとも小波に君をばゆかし思ふはやわが

藁蓑の頭巾纏いて牧草を暗きサイロで黙々と踏む

雛壇の古き団地の秋風に響く槌音二世代普請

恥らいてとくべつな日の富士の山雲間に見ゆる初の白雪

江ノ電のレトロ車両の窓に寄る若き二人の瞳燃えけり

停電に悪夢の灯火管制のトラウマ払いゆとりもて待つ

空青き旗翩翻と駒沢に戦後終りし十月十日

欧州の古き街並とりどりのコインに思う旅のいろいろ

ひっそりと戸塚の宿の小碑文真っ赤なポルシェ風巻きてゆく

生垣の錆び色深き剪定の陰に深紅の帰り花見ゆ

花筏吹き重なりてただよへり愛はしさまに自在うばはる

さざめきを渚の潮に秋の朝誓いはなくもまたの出合いを

大群を上目に見やる五六羽の渡りいずこへ茜雲果つ

焼黍にふるさとを嗅ぎかぶりつく見やるテレビに初雪の報

北便りルビーの如き弾性体炊きたて飯に盛りてかきこむ

三十路きてすきま風しむ友ありぬ虚心の秋に心起てしか

現世のよろずことごと過客なる日々の吾こと輪廻万象

往昔の万事思へば吾今を心澄みたり秋のあけぼの

おなじ道おなじ時刻に「おはよう！」とウオーキングの清々しき人

残菊に雨を重ねし水茎のあまたの句より特選となる

白兎なる社の御籤大吉と顕わの磯をとび渡りゆく

書を閲つ不乱に過ぎて東雲の企業戦士の友の懐かし

幾年の名刺の束にたばかりて手にとる葉ごと思ひ廻らす

桜木の錆び深まりし段かずら朱き社殿を遥かに拝す

千年の巖の如き公孫樹黄葉に化して新春を待つ

歌よめば寂しさあふること多き君をばゆかし思ふはやわが

諍いて何かをいえば済むものを無言のままに箸をすすめる

老境に己の何を語りしか故なきことの何を語らむ

山城の跡なる谷（やつ）の山柿の朱の憐れや猛きもののふ

山肌に数多の皺の悍ましき灰降り続き島は荒れゆく

幾ばくか勁草見ゆるロカ岬いにしえ人の夢や遥かに

気遣ひて顔をつくりて時過ぎて一人真夜に深く息づく

酒を呑み高吟しばし別れゆく淋しがりやが集う友垣

ワイエスの荒野の家の連作に青き心のあふれるを知る８３歳のアメリカの画家

青年の心のままに躍りいて夕べ静かに時の過ぎしを

大円の真っ赤な今日の太陽にまた青年の如き心に

幼子の指に点りて黒き眼に線香花火映りて滅す

権力の畏れをしらぬ高声に衆の心は沈みゆくなり

白山の風に豊かな稲架の波衆に声なき葬送の列

魂のドンコザックのハーモニー初めて聴きしときの感動

うつろひて鎌倉山の緑錆ふ時うつ鐘のひくく響けり

新雪に裏大の字にうつぷして冷たき雪に呼気あたたかき

微かには同じ想い出何処にか老眼鏡で遠くをみやる

現しくも移し心も弁へぬ贖ふも知らぬ青き道心
何の色永田の屯を闊歩する裸の長の残るシャッポは
先見えぬ時代の処処のつむじ風カウントダウンの二十世紀は
半天に闇の残りし小径ゆくウオーキングの交わす言の葉
老父母の昔語りのとつとつと吾懊悩の氷柱ゆるみて
ベンツより小さき戦車椰子蔭に世紀を越える赤きキャタピラ
残りたる二十世紀の暦には水を湛へし黒部峡谷
肉月の偏もつ文字を羅列せり確かなるかや我肉体の
うら若き僧の眼の一点にゆらぐともしび砂の曼荼羅
大脳の何処かにあるは確かでも錆びし回路の情けなきこと
壁崩る１９８９年とフランスの１７８９年の嵐を思う
漆黒にゆらぐ篝火白拍子二人静の舞やとけゆく
ボタ山に幼き夢の一もんめ酔へばかの地をかたる友あり
混迷は天誅なるか昏迷の二十日を余す二十世紀は
泡立草手向けむ花にあらねども淡き冬日の枯野に燃ゆる
ぽろぽろと崩れさるもののみ見ゆる人智悲しき二十世紀は
華やかなイルミネーション鏤めしかって海なる「青べか」の沖
外套の若きドアマン寒風に若き二人の荷を捌きをり
大網の手に余りては漁ならむ百尺竿頭一歩進まむ
雪しまき逃れ逃れて山小屋にまんじりもなき光る朝明け
ポンポンと言葉かさねしモンタージュ　リズミカルなる修司駆けゆく
朝浜の潮のあとの黒々と寄すさざ波の白きソナチネ
イヴの華BBCポップのフィナーレ電話をとれば妹の入院

安息の天の恵みと思ひ伏し笑み満面の清し迎春

千年のうつりありしも万象の古今にうたふもののあはれは

残る葉を嬲りて過ぐる木枯らしが小枝にそっと春を醸せり

ゆっくりと透く寒空をけや木道淡き西日を北に向かいて

ひとりゐてこころ許なく打つキィの着信メール無きを知りつつ

世のことの不覚のながれ止めずなり何ぞ不易か行く年おもふ

ならはしの世のことごとの離れなむも清げなるかな幣の門松

古里も皇御軍(すめらみくさ)も遠火事に返歌などして思ふやがわが

東雲の明けまく惜しみ耀ひて高みに鳶の初なきの声

揺れうごく心の襞の眼差に何ぞ悩みを口に出さねど

幾たびもおくのほそ道たどりきし今年の友はかの山寺に

凍て果てし白き光りに昵みいしダイヤモンドダスト輝ける朝

赤富士の江ノ島橋に陣なせるシャッター音の波に響けり

いく世へむ東に天地遥々のモンゴロイドの野ざらしを思ふ

ウラルから南に下りマジャールは黒き瞳に星を数へつ

アメンボの群がる如く波立てば冷たき海にサーファー若き

おちこちの車列ぬひゆくオートバイ春着の街の若き急便

湾岸のルート狭しと連なりてトラック繁く北に南に

初空の十勝連山神さぶる厄の世の清まはるらむ

水仙の青き剣先庭隅の憂きも惑ひも天に吹きだす

大皿のブイヤベースの蟹の色青くかがやくコートダジュール

分水の道に佇み降る雪の行方を見遣る遥かな海の

参道を西に向かいて潮騒に伊豆大島を遥か望みて

荒海の岬へだつとも風かよふ秘めし心の夢にのせなむ
追ひかける夢に魘され盗汗の遠くなりけり夢多き頃
凍てつきて音もはてなむ星の夜の赤き熟柿の舌に溶けゆく
ほのぼのと寡黙の時の過ぎゆきて口に運んだ冷めたコーヒー
遥かなる干潟の風に僧院の尖塔そびゆモンサンミッシェル
夕映えの黄金豊かな冬磯に佇み吾はひとり愉しむ
はらはらと万花こぼれる北の春石狩川は龍の如くに
遥かなる思ひつめたる山稜に思ひのしかにいつぞ立ちなむ
今とても同じからずや歳々のことごとすべて遠くなつかし
訪れしサイパン島の夕映えの珊瑚の浦の美しきかな
かすかなる雪解の音のトレモロに春待ちわびし幼き日々を
ごうごうと吹雪荒れたる鎌倉のかの雀らのいずこ宿りし
紅梅の雪残りたる枝々にかそけき春の色のともれり
影富士の厳かなりし浦に立つ雲か霞か朱に染まるを
焼酎の湯割りを愛でて食毎に和む心の父の卒寿は
夏祓きしみ微かに巫女を待つ廊の緑の涼しかりけり
冴え冴えと波にただよう月光の胸に迫りてわれは祈らむ
梵鐘の午前六時の渚にて鐘を見たしと遠回りする
東雲のやうやう朱になずみきて山端をいずる一閃を待つ
さりげなく虚心にあらむわがこころ惑うことなき日々をおくらむ
ユトリロの肖像描くヴァラドンの油彩に母の思いあふれて
遥々の唐の縁の陶片に和賀江の跡の春の大潮
奢りきて二十世紀のわざわいの根源なりき浅き人智は

空狭き小さき谷

幾重にも雪に埋もれしぼたの跡メロンハウスに往時をしのぶ

夜更けまで霙打ちたる朝ぼらけいよよ紅さす窓の梅が枝

小春日の渚に寄する小波の真白き潮のささやきを聞く

冬枯れの小径たどりて眺むれば絵島かすみて錆びもとけ初む

まろびゐてしどろにありし野仏の冬日のなかにしづみてゐたり

とりどりのアロマに酔いしティスティング二月の夕べワインにあそぶ

ユニクロのペアールックのきぬぎぬの時惜しむかに春磯に立つ

いにしえの法王をりし城門の夾竹桃の盛んなるかな

流離ひし草にしのぎし乞食の何をか得べし衆に無きこと

子らの声朝な夕なの時ありし宅地の冬の静かに暮るる

徘徊の黒き原潜小船打ち海の若人未だ帰らず

お前がね生まれたときは小さなで産湯でねそうすやすや寝てね

孫たちも藍の浴衣でおばあちゃん日永嬉しき健康ランド

延々とレジに列なすカルフール三色の旗子らの瞳に

めぐりきて惑ふ間となく長となり惑ひし日々の虚しくあらむ

あはゆきのなべて消へゆくことの由ことはしばしの枝にむつまむ

遥々の伏流清き柿田川冨士の白雪幾世隔てむ

びょうびょうとそれと覚しき春疾風生きとし生きるものや目覚めむ

明け方のひととき強き春の雨花粉のとばぬことのうれしき

潮溜まり磯広々と春潮の小網をかざし子ら戯むれり

さざ波の白く広がる朝浜ににまごうばかりに立春の雪

しらじらの虚言の多き国長に衆の心は春を待つのみ

吹く風の鳴りくぐもりし春雷の遠くにゆきて鳶の行き連る
睡蓮のいまだ目覚めぬほとりにて猛きもののふ思ふはやわが　鶴岡八幡・源平池
待ちわびし門の守宮の目覚めらむ出でよ出でよと仰ぎみる夜半
はえば立て笑いて泣けば可愛いと欲しきものなど欲しきものなど
貧にたへ懊悩しつつ貧にゐて佐藤佐太郎歌詠みつげり
折々の心にふるる生業の息つきなるか同胞の歌
濁流にわが竿さしつ現世の清き澪へと虚心にゆかむ
春や春除隊の父のゲートルを汚せし泥に思うはあの春　増殖をよみて
折々に孫や如何にと問う妻の心は吾子を思う言の葉
処女雪に埋もれもがきし青春の痛みも今は美しきもの
満るほど何かわびしき月の夜のもとなことなど思ふはやわが
春暁の未だ静けき裸木の精を湛ふはただに嬉しき
待ちわびて風邪と花粉に襲われむとはいえ春の日永にあれば
明滅の絵島の灯り遠くみて鎌倉山に初音追ひきく
なにもなきはてなき空と風にゐてしばし心の安らぎをえむ
目の前の今は止まりし鞦韆に軽ろく手を添へぬくもりを追ふ
ふららこと春の余白を詠みをりて互いのキィは同時に打たる
春浅き小さな街の朝市にエネルギシュな笑いざわめく
同胞とモントリオール議定書の思ひただしつ未来にかけむ
あっかるくぶっきらぼーにひょうきんに振舞う青き疼く心根
朝なさなとく生業を詠みつぎて日暮に明日を思ふやはわが
現世のうつろひわたることごとの冨士にかたぶくあしたへの月
をちこちの御符を纏ひし青年の街をたばしる速便単車

この海の光りと風の戯むるをいにしへ人の残せし歌に
なつかしき三浦大根輪に切りてザックザックと疾く頬張りぬ
尋ねきて語りつがれし元禄の赤穂の志士の思ひやいかに
おぞましく朽ちし巨木に躍動す虫けらという尊き命
をさな木の恥らふごとき初心なる青き蕾みにしばし心とどめむ
凝らしても吾におぼろなむら雨をものの芽よろずしかと待ちける
きはまれる悲しみ故に閉ざすらし固き思ひの睦るを待たん
交はりてはじめて知るや吾が成せる日々ことごとの色も匂いも
石仏の跡形もなき岩窟のいにしえ人の祈りはあらむ
春の空のくぐもる光りうけをりて毛細管にめぐる血をおぼゆ
虚しさの淵をいでばやおりおりの絵と人間の『絵のなかの散歩』
雲閉じて今にも雨の来るらしき花に冷たき風も吹き初む
友禅の賀茂の清みに紅色のよどむ岸辺に落花舞ひけり
満開の花に小リスが群がりて枝から枝へ小鳥のやうに
海なりのとほくきこへしあばらやの花めでくまむながき斗の酒
渚にてさざ波白くよす砂にふる雪きへて春遠からじ
築かれし渚の砂のマンションのまだそのままに波や寄せくる
それぞれの迎へる春はとりどりの仕立て直しの衣まとひて
新入の若き決意の面々と夢をともにし日々にすすまな
廃材の残る更地にさくら散る生垣荒れて今は声なき
北の野のまだ覚めるやらぬ雪の間のささやく風に散る花もなき
うらうらとただよふごとく散る花に此岸にたくむ吾をわすれむ
山峡にふる花びらの幽けしや沈金のごと岨のせせらぎ

ゆかむとす旅のすがらの手合いなど思ふなどして予ねてたのしぶ
あさの日に恥かしげなる春の山夕べに深き憂ひをたたふ
花過ぎしだあれもいない鞦韆のふいになつかし風にゆれるを
よせてまた返へす潮間の小波の潮の満てるは猛けるが如し
ジェット機の影落つ春の山間にやや斜交いに煙たなびく
夕空の朱に遊弋せし鳶の仰ぎし吾をいかに思ふや
新芽なす谷のあはいのそこだけに色をまとひし山桜かな
傷癒へてそなたの傷を思ふときそっとなぞるは壁のイニシャル
故郷で「す・き・で・す・・さ・つ・ぽ・ろ」口ずさむ疼く傷など無くもナツメロ
黄塵のセピアに暮れし北の空西の浄土に思ひはすなり
鏑矢を番へて春を疾駆する凛々しき射手の風にさやけき
生業に追はれ追はれし現世のおきそひ末は歌を詠まばや
思ひては言ひたきことの多かりきそはなかなかに難きことなり
ずっと前大きな洞にささやいた「ヒ・ミ・ツ」は春の芽吹きになりて
西からの逆風吹けばその雨は分水嶺の東にゆかむ
したたれる濁れる水を手の平に防空壕のうるわしき春
稲村の蹈鞴に吹きし黒砂は際殊などの因果を知るや
仏蘭西の古城の端の館には狩を証せし鹿の角など
磨かれしロビーをかける幼子の手より離れし風船が浮く
思ひても叶はぬことの多かりき夕焼け雲にそはと思へる
江ノ島の西の高みに佇みて富士の茜の没するを見ゆ
錆びいろをまとひし山がたちまちに視界くまなき光る緑よ
病室を出て盛んなる万緑に心弾みし幼き時を

水金地火木土天海冥と朗誦しては得意顔の子

音なくも血のつながりし子の故になにか届くも届かぬも良し

花便りありてかの地を思ひたり受験準備の厳冬の日々

おととといが峠だったの言の葉を信じて友は病克せり

めのまへの青き芽吹きのあまたなるゆるりあゆみて語りかけばや

ながむれば鳥わたりゆく京の空なほに見ゆれどみな筋違に

いにしへのもののふの道たどりては孫とかたりし昔々を

いにしへはおほ寺なりし山門の影を出づれば己が月影

ひだり手に成田空港見下ろせば玩具のような機々犇めきて

うつし世の聳ゆるものの朧たりめぐりくるらし春をかぞへむ

ゆく春のアンテナわたる朝なさな鳴くうぐいすの哀しくもあり

春風に淡紅色のアンランジュ月に香りて熟しゆくなり

立錐にひしめく星に無限をば思ひ明かせし青春ありき

むらさきの衣の裾をひくように花鉄線はそよ風の中

ひっそりと葉かげに白き柚子の花しかと香りて秋を凌げり

いぬねこを好きになれぬはトラウマか玩具ごときも吾を避けゆく

暮れかたの梅雨をきざせし急坂を何買ふと無くコンビニへゆく

高みより梧桐の淡き花の雲ここは異国ぞ北京郊外

勁草に船影ぞなきロカ岬地果つところと吾も思ひき

新ジャガの煮っころがしを皮ぐるみ口にほふれば生きてる実感

かすかなる路傍の風にどくだみの夕陽にゆれし白き十字は

たそがれに残りて白く輝けるなほまぼろしかくちなしの花

朝なさな露を纏ひて紫陽花は色あざやかに日々に満ちゆく

やさしさが思ひがけなきトラウマにそは橋叩くことのはじまり

目礼を重ねし四季の朝なさな路地ゆくひとの名は知らねども

一対の角を具えし鬼出でて能楽堂にしわぶきも消ゆ

モバイルのアンテナ渡り鶯は朝のお勤めわがもの顔に

梅雨雲が眼下に見ゆる機窓から遥かに湧きし夏雲も見ゆ

眼下には陸と海との二色が見え隠れしつ襟裳へ向かう

点ひとつただよふごとき蛍火が真闇の宙にやがて止りぬ　昨夜の蛍狩

朝なさなカルシウム剤嚥下せる妻癒さまく骨粗鬆症

東雲のはるか夏海を凝視せる若き男は身じろぎもせず

夏海の水禍の子らの痛ましき高波巻ける遠き台風

時流れ今の子らはという吾も虹をかけんと駆けし時あり

腰越の浜みる露地の小仏に弔ふ花のたれか手むけむ

いつの間に小さくなりし父母が目を見開きて吾を送りぬ

構造を改革せむと口々にその言の葉の今は虚しく

糾へる縄の如しとすべからく思ひて沿はぬ日々を見遣りぬ

暑気残る夜の浜辺で若者は眠るを忘れ時を盛りぬ

果てまでも埋め尽せる向日葵は焦がれし如く黒々として

午前四時波のまにまに限りなく蒼くまたたく夜光虫群

患ひし目にはかたしき青空の忘れ難きは終戦の日の

3掛ける7変速の自転車を押して坂ゆく歯車見つつ

とりどりの夏着のままに自転車で地の老人が釣りに集まる

大の字の三画の尾ののびやかに真闇を焦がす京の送り火

外堤に高波くだけ鳴動しそそり立ちたる潮の大壁

ねがはくは心静かにおもむきて枯るるがままに黄泉路たどらむ
凌霄のこぼれる朝に露ありて散り敷く門に暫し吾あり
茶髪子も禿頭なりしいつの日か地黒き髪を懐かしむらむ
山峡の今は静けき巨大ダムロマンをかけし男たちの碑
早暁の霧払われし丘陵の遥かシャトウに葡萄連なる
重陽のいはれ尋ねし孫たちはスリーナインは銀河鉄道の夜と
匂ひたつ醸しところの息おもふ月を祭りし御酒捧げゐて
逆縁かブラウン管に音もなく崩れゆくなり摩天楼二つ
濡れ衣もいつしか渇くそのときに賽はいずれにふられしことか
いつの間にか撤収されし海の家いま砂浜は自然のままに
妻ととる夕餉にふっと違いては酒肴のうまき味は戻らじ
初雪に威を正したる不二の嶺紅の入日にほんのりとして
有り明けの雲むらさきに茜さすまだきにうすき十六夜の月
朝露に浜砂しかと湿りゐて秋深まるを裸足の吾に
磯釣りの腕伏す日々の長かりき友陶然の石鯛ゲット
牛乳をコップに呷る朝なさな骨粗鬆症避けむと妻は
澄みわたるパティオの空に二人してバルーンに託す夫婦の誓い
回廊を鹿の髑髏でうめ尽す誉れ高かる貴族の館
両親に祖父母二組七五三スキップする子のシックスポケット
秋浜の誰が丹精の砂の家壁の小窓に夢がただよう
遥々のとどろく音に欹てて久しきことの秋雷と知る
久しきやかな三文字の詠人の明るき歌に弾む心を
シャンツエの如く途切れし新設路バーゲンの旗反対の旗

嬉々として羽織袴の小公子本殿を背にガッツポーズを
枯葉ふるごとく落ちゆく爆弾は枯葉も見えぬアフガンの地に
物差しで引きたるごとき国境は二十世紀の恥の遺跡か
釣磯へ絵島の橋をゆくわれに富士を仰げと有明の月
戦乱にはわが身の明日の実存をただそれだけを欲し求める
背まろく小さくなりし母の手が日に照らされて白く大きく
絵ノ島の明けもてゆける冷ゆ磯にあまたの星を驚きつみる
凪わたり磯の根見ゆる冬潮に銀鱗鈍き小魚の群れ
透きとおる十一月の夕まぐれほのかに富士は赤く聳える
さはやかに老ひゆく道をめぐらせばわが歳月は夢にすくなし
長き夜に卯波の小間のオフの会かねて親しき様に交わる
群れをりて鳴くやくぐもる夕鴉悲しきことの弔いなるか
うるわしき高き声域夢はるか今バリトンで第九を歌う
戦乱は過酷なれども思い出にわが人生は豊かなりけり
朝なさな行き交う人で騒がしき駅をわが家と寝るホームレス
ベルリンは瑕疵ぬぐひてや東独の往事の猛き若者は今
旧臘の名簿の友のありし日を偲びつ過ぎしひと年をしる
極月のとく来たりては不意なりし余日を満たすよき術もがな
十歳は頭巾かぶって空仰ぎグラマンめがけ口でダッダッダッと
香ばしき夕べの凪を尋ねきて焚きし葉の香のとりどりなるを
在りしもの失せたるけふのあはれなるあしたに萌へむ惜しきもの
口髭のじっと見つめる漱石に親しみつつも今日は忌日と
豪雪に千歳空港閉ざされて二日も待つがみんな平穏

立ちんぼを暫し嘲る雪女郎“冬・ＪＲ・快適”の車内広告
季を問わず濃き茄子色の親潮は北の魚を抱く母なり
ホッチャレの白く流るる澪筋をシャケ黒々と遡りゆくなり
寒風に実柚子の日ごと色なして湯に香りたつ叙情を待てり
寒雲の矢切の渡し寂しかり集ひし夏の賑はひし日を
遥かなるＤＮＡに詩ありぬ我今ありて何処へゆくや
窓越しに錆びゆく木々の連なるを薄日の空にわれは楽しむ
美しき言葉は過去の仮定形未然に深き悩み醸せり
年の夜へ七夜ばかりをたひらにとこの年の瀬はことに祈らむ
おほとしのともに卒寿の父母のすこやかなるを夢に見ばやと
大年の過ぎたるほどの青天を凪の浜辺でひとり楽しむ
皮ジャンの防寒コートに身を寄せし若き二人に浜の元朝
あまたなる言の葉あれどわがまつはいまは沙汰なき君が言の葉
初富士の白虎のごとき存生に天動くやに思ひたりけり
あの旅を思ひてみれは夏の日のモンサンミッシェル干潟にありき
喜びの時は疾く過ぐつかの間に憂きこと時は沼に澱めり
いつにても二千歩ほどを歩みゆく絵島を指呼の浜や愛しき
半島の東の稜のV字から冬日一閃なべて始まる
河口から遠く離れし石狩の厳しき冬に雪晴をゆく
入院を重ね萎えゆく老妻をいま助けなと卒寿の父は
冬至よりひと月余り過ぎしいま日の出の位置は北に目映き
夕焼けを追ふやうにゆく飛行機は冬空をゆく光る物体
時としてこの詩のようにさし示すこころにひそむ何かに出会う

コルク質すべて削がれし大幹はまばゆきまでに白く光りぬ
紅梅のうつろふさまを背にして今目覚めんと白き梅が枝
紅梅の色のさめゆく理に朝な朝なの時を惜しめり
日溜りでいかでか鳥の昵むるは紅いならぬまだき梅が枝
ぬるむ日の二三日ありて冴え返りまた冴え返りつつ春ならむ
埋み火の残りし灰のぬくもりが今は小さき炎となりぬ
のりものに座すやまどろむ吾にとり春眠なべて時をえらばず
朝まだき渚の春の小波は散りゆくさまに寄するがさまに
群れすずめ追ふ椋鳥に四十雀とどめは目白朝の餌場は
庭隅のひとつ置かれし陶の椅子巣篭もりせんと四十雀とふ
くぐもれる朝の光は如月のまたくぐもりつ春をもてくる
乳色のヴェールのような春空を群れゆく鳥の声も乳色
黎明に春雷四方にとどろきてけふまた楽し競べ歌なぞ
浅き春まだき潮に鮎の子は日に増し親の姿に群れり
せせらぎは光の色に流れゐて光を散らす白き指先
白波の春一番の浜に立ち忘れたきこと風に砕けり
遠くからその人としる菅帽子ひねもす竿と春とうたた寝
花の山わきたるさまにぎはひて花のなみだや一陣の風
過ぎし日のふと浮かびくるさえあるも何処か深く出で来ぬもあり
けはひする錦ヶ浦の花のころ花にたゆたふ浦は好まし
好ましき春はこの春花の春好きいでたちに春は熟れゆく
世のことの夢のとぼしき境涯にあふれし夢の昔をおもふ
海原をかける光のやはらかき好ましきかな春の磯辺は

くり言もたはぶる言もいつの日か重ねかはすや真言と成らむ

季うつり山笑むさまも好ましき朝の斜光に破山一笑

よきことのうれふることのめぐるなむ人恋ふことのせつなきことの

塀の外地に重なりし赤椿長き旅路か開かぬ雨戸に

うつろひの季をかざりし花々の盛りしときをはや忘れめや

ふと見ればモネの日傘の舞うように初夏はとりどり谷

花めくや笑みにすべてを包みても眉間

孤高なる赤富士はるかフジ子聴くにぎはふ浜にひとり楽しむ

眼差しは真を射んとして暫しまたゆっくりと目蓋を伏せり

好きだよといへばくすくす笑ふだけモネの日傘の風に舞ふやに

抜栓のコルクに想う星霜を生きしワインをいざいざ飲まん

窓外の雨上がりなる透明にグラスを満たすレッドワインで

真をば求めんとして迷ひたり返し迷ひつ真はここに

築山のこんもりとした植え込みのにほい立ちたる躑躅の中に

窓の外明るく過ぐる幾波にも黄色の傘の登校の子ら

そそくりし四十五年のなりはひをおさめあしたの望みおはばや

短夜に七部集など紐解きてのっと日の出を拝む江ノ島

二組の母子の間にワイン酌む弾む会話に今宵楽しき

くねくねとビルをぬひゆく「ゆりかもめ」ブリッジゆれてゆりかもめ追ふ

桑の実を手に跨ぎたる枝間より機銃掃射のグラマンの人

ベル鳴りて冬を残せし二の腕のわが頬かすめ吊り輪に向かう

ちはやぶるはたた神なる饗宴は連戦なるとも衰ふ気もなし

東雲の雲か海かの水平に啓示のごとき光ありなむ

ものなべて激しく醸すときをへむ待つなむときを熟し成るまで

'61なる類い稀なるヴィンテージ熟し成りたりテロアを想ふ

様は無く、さん、君、ちゃん、も無しがいい呼べば親しき二文字三文字

低空に群をなしたる浜鳶は子の手の菓子を将に襲うぞ

混とんの世にＦＩＦＡ２００２げに虚ろなむとき過ぎゆけば

せいたかのひまわりの実の黒々とアンダルシアの果てなき地平を

信号の三つの色の点滅にわが人生の来しかたを見つ

真紅なるフラッグうねりてモナコ夏F1の火の揺るがす中に

刻々と色を織りなす潮目をば魚の心で好むはやわが

北国の遅々なる春を待ちきれず緑したたる初夏は来にけり

きざはしの古きついりてしづけしく幾年ほどのついりを経るや

湧き立ちし柿田の水の永久なるか不二なるものはゆかしき君か

わが地球ＦＩＦＡ一色の時過ぎて空中衝突の報せありたり

西域の洋上はるか台風の余す高波に強きを推しぬ

空限る墨描く如き夏富士は台風一過の雲を見遣りぬ

白朧の平らき空をカンバスに梅雨夕焼けが紅さしはじむ

沖目よりうねりてすだく高波の岩にくだける音ぞ百様

四五発の五臓六腑へ大花火たちまち夕べのしじまとなりぬ

片影の失せし十字で立止まり思い違わぬ人と見合いつ

夏の日の白きヴェールの高空に鳶の一羽が天になりをり

立秋と知りて誰ぞが吹き寄こすおなじ昨日の山の涼風

涼しげに宙に舞いたる鳶二羽われらが炎暑あざ笑うかに

高波に洋上遥か台風の猛き自然の理を知る

虫の音に同じからずやこの秋は万感ありて兆す何かを
炎天に黙するやうに色なせる百日紅は日々にあたらし
偲びつつアンペリアルのラトーゥルをグラスに満たす八月尽の夜
東雲の小高き丘の稜線の黒き影絵が色づくまでを
けふの秋いろなき雨のたのしけれみどりとわれはおなじ恵みに
重九を迎えんとしてわれの代は激し六十有余年かな
重ね詠むげに重九のカキコにも星に託せし願いあるやも
重九の明けにし今朝の山緑なにやら兆す錆の色など　皆様ありがとうございます
繰り返す9イレブンの映像に祈りは見えず悲しみの詩
秋冷のわずかに固き朝ぼらけ目覚めてはまたうたた寝や好し
立ちのぼる夜気にみちたる秋の香にしばしの雨のありがたきかな
名月に好きなワインを捧げては出て来い出て来いアマローネ！と
皓皓と赤面もせぬ名月に菫もがなの漱石やいかに
名月にみやびなきまで虫すだき雨月の今宵いずこへゆかむ
潮入りの川を満たしつ初潮がせり上がりつつ小波立てり
宵闇におちこちすだく声のしてすだくは虫も同じなりけり
こしかたのひと日ひと日にいろあらむわが人生はさしてなにいろ
花金の海辺の夜を疾駆するわが世とばかり集く若者
盛秋にただひたすらに身をおきて虚ろなりせば心満たせり
折々のそぞろの風に人恋しそは何故か深まる秋の
ゆく径のたわわに赤き七竈すでにおさなき母たずねんと
窯変のさまに染めかく柿紅葉いとさりげなく膳に添ひたり
強かりき母のおもては優しかり黄泉への舞いを日々さぐるやに

医の友は一病たりとも滅するとやよろず枯れるを待つも果てなき
ことごとの言い尽くせぬは何故か伝えん意志の乏しき故か
那智滝のたちまち変わる形相のそこによろずの神がおわすを
久々に風邪なるものに罹りたりやすきに沈む日々を過ごしぬ
大虹が東に懸かる夕暮れの西に明るき明日が見えり
東西にかよう銀杏の大並木夕べ散りゆくさまは妖しき
闌のたゆたふ秋の雲居をば数添ふやうに鳥渡りゆく
ピラカンサの鈴なる枝の赤き実は誘うごとく風に揺れたり
晩秋の鎌倉山の透く木々の実を啄ばみつ鳥が群れをり
朝夕はそぞろ寒しの電話あり赤きイクラが追うように来り
照りはえし四五株ほどのすすき穂が引込線の錆びを覆いて
人見えぬ刈田は小春日和にて上総の海は光た走る
巨きもののたうつ如くすすき野は霙るる風の澪を映せり
占ひの何かことある思ひさへけふの夕べにみな忘るらん
終なりていかなる情の残るにやわれ求めゆく人恋ふことを
朽ちし葉のかさなり合ひし土くれにめぐりめぐりし命ありけり
呑んべぃの　だくれ姿は消えゆけり　通りの今はカップルの渦
わが影のジャコメッティに拍手して夕べベルトは鱈に腹せり
季寄せなど残りわずかになりし今にぎははしきや手帳売り場は
めくるめく壁はひつたふ蔦もみじはらりはらはら洒脱をしるや
旭光が銀杏黄葉を煉りあげて黄金の如く北の大地に
そのころはムンムンしてた名画座でいつも小さき自分が観ていた
晩秋の鎌倉山のさび色をひとり愛でをり午後の日溜り

初冬の九十九折りゆく箱根路のミラーに映るさびの色かな

仲通り異国の文字のウインドウ黄葉仰ぎつ大手町ゆく

改むる展望の塔江ノ島の一望にせむ広重の景

見るもなき北の斜面のそこここに今は限りの櫨紅葉見ゆ

冬ざれのしぶけし磯に竿ふれば雲の間にまに箱根連山

小窓から暗きシベリヤ見下ろせば東かすかに帰る実感

朝焼けに羽ばたく鳥の姿にも千羽鶴にも見えし冬雲

暮迅しバス待つ角に柔らかきお好み焼きの風が流れて

歌詠みに横好きならぬ縦好きも楽しみ召され評定なんぞは

旬なれば怪魚もへちまも美味かろう吊るし鮟鱇つとに美くし

リニューアルの住まいながらの工程を寸分乱さぬ職人仕事

まだらにてはにかむような秋のいろ森はやがては光をまとう

坦らかな遥か点なる直線の落葉松の並木道行く

昼下がりランチョン盛るレストラン集くミセスの何故に溌剌

乳母車に一対の子を乗せ坂を押しあがらんとうら若き母は

老い成りてすでに失せたる表情の眼の奥に性を宿せり

老いなりてあはひに母は母をぬぎ老いとげなむと独りあはいに

老いなりてベッドの母は丸く居て冬の光に浮かびつ消えつ

室内に応えて咆える犬の来て老父の声は幸に弾めり

老いなりてベッドの宙に声もなく窓に向かひて母は埋もれり

老父からお前来る日はしばれるぞ雪もふるぞと電話たびたび

右膝が今朝も痛むと冷ゆ朝の電話の声の痛ましきかな

右からの木枯らし頬にけやき道おなじ記憶をどこかにさがす

ことごとく繁りていたる葉をぬぎて凛々として寒風に立つ

同窓の同郷なりし何がしと不況の故のセールス多き

ふるさとの高校卒業五十年記念をやると言いし友逝く

初雪が屋根の個性を白くして冬の化粧やわが街の顔

淡き日に瓦模様が浮き出でて積もりし屋根の雪が解けゆく

年を祝ぐひととせを経し水茎に故人を偲びつ春遠からじ

枝先に少し残りし初雪は朝の光にプリズムとなる

音もなき白き真霜の平らかにしばれる朝に故郷を想う

寒天のあれがスバルと指し示す北の都の老ドライバー

二筋の轍をなぞり雪道をくだり行く背が息をおきゆく

退きてのち初の師走を迎へなむゆるりと時の過ぎゆくを知る

早暁に詠まんとすれど心なく歌は東雲見ゆる後なり

年明けに再びアジアの開拓に夫婦茶碗の老いたる友が

ほそ道を学ばんとしてひも解けば易く芭蕉は尽くせぬを知る

つれづれに旅に何処と思えども思うまにまに時は過ぎゆく

ひとひらの葉もなき梅の枝先にすずめ群れをり日に当たりをり

点になるほどの高みに舞う鳶を見上ぐるわれは師走に向かう

寒風に海ははるかに澄わたり波ははるかな伊豆大島へ

冬ざれの島にクレーンが聳え立ち新たな塔を普請しをりて

寒風に茶髪の鳶のエィ・オーと組みあがりゆく東京ミレナリオ

来しかたの五百のうたを詠みつらねげに千日を笑むはやわが

カラカラと初氷塊を蹴りてゆく登校子らの高らかな声

きのふけふ師走にしかとめぐらせばよきことばかり思ふはやわが

大年にむかふ日かさねしどけなくおもふこと有りまた無くもあり
風邪気味にかまけて吾は所在無く師走は中の五の日を過ごす
賀状先閲しをりたる名の中に黄泉へはふりし友ありにけり
幼子の手のポップコーン狙いつつ鋭く鳶は羽ばたきをりて
艦砲に壊滅したる故郷はわがトラウマに折々の夢
年の瀬に紅あざやかな六地蔵にぎわう街をいつものように
車窓から遠近に見ゆ点滅の聖樹に今日の幸せありて
山影は墨の如くに滴りて光芒はるか北の星辰
決戦の見えぬ戦の無機なるは道化も何も無きが如くに
スコールを牛ひくアジアンレポートに銃後の貧しきときを思いつ
けふてふつくにあまりし九にをり去年となりける今年にわれは
過ぎたるは猶のバブルを過ぎてより幾たびなりや大つごもりは
わが天に唾棄することの愚かさを仰臥の後の冷汗に知る